

「今日の説教、聴き手のために」 (講壇-14) 2015/4/26 明治学院教会

「言葉と主体」

岩井健作 (前牧師)

聖書 ルカ 6章39節-45節、ローマ8章26節

「“霊” 自らが、言葉に表せないうめきをもって執り成してくださる」

1、谷川俊太郎の詩の一節です。「・・・あんたは わたしのまえにいるけれど／なんだか テレビでみているみたい／けしっちゃいたいけど／すいっちがない」。(「はだかー谷川俊太郎詩集」)。主体の懸かっている饒舌な言葉の語り手への痛烈な反撃です。言葉は伝達やコミュニケーションに便利なものですが、相手の心に届かない言葉や、主体がかかっている言葉は、なるほどと社会通念や常識として整っていても、わざわざ言うことはないのです。むしろ黙っていて欲しいものです。

2、「盲人は盲人の手引き道案内をすることができようか。二人とも穴に落ち込みはしないか」(ルカ6:39)。指導者が駄目だと、とんだことになる、という古い諺だと言われています。ルカ福音書ではイエスの「平野の説教」の終わりの部分に、マタイの平行句はマタイ15:14に使われています。ここに収録されるまでには、イエスの言葉群を纏めた「語録集」(Q)教団の考え(神学)がベースにある、と研究者は言っています。全体の文脈からは、やはり当時の教団の指導者層への不誠実、言行不一致への批判として用いられています。けれども、盲人に対するイエスの他の言葉(ヨハネ9:3, マルコ8:22, 10:46f)から、イエスが盲人を悪い例にたとえた、とは考えられません。盲人は盲人として認めて生きること、「神のみわざが、彼の上に現れるためである」(ヨハネ9:3, この「肯定」に生かされた方はたくさんいます)というのがイエスの主張です。もし、イエスが言ったとすれば、盲人が社会的差別のゆえに盲人同志もたれ合って穴に落ちる悲惨があつてよいのか、という社会批判として、また盲人の自立への促しを暗に諺の裏に含ませて語られた逆説的言葉として受け取られます。この諺を用いてイエスが語られたならば、盲人差別の再生産につながるような語り方はしなかったでしょう。ルカの教団の指導者が駄目なのであれば、書き手が「あなたたちは駄目だ」と面と向かって言うのが「主体」的発言です。「木と実の関係」の例話からすれば、ルカの教会も言行不一致に悩んでいたかも知れません。これは、現代を含めて、歴史の中を歩む教会が負い続けてきた課題でもあります。

3、イエスの言葉は、イエスの十字架の死に極まる生涯と重ね合わせる時、それは、一般的格言、教訓、であることを破って、相手の主体を奥底から揺さぶる言葉となります。例えば、前回述べた「もうこれでいい(アベケイ)」(マルコ14:41)においても、弟子の無理解、弱さを承知で「受容し、赦す」イエスの「十字架の主体」があつた言葉でありました。言葉は、語り手の主体自身が言葉の内容を引き受けている出来事において生きた言葉となります。パウロは「福音」を「十字架の言葉」(コリⅠ1:18)と表現しました。いったいそんなことは可能なのか、という恐れがあります。

4、そこに登場するのが、ローマ8:26の「“霊”の執り成し」です。これは「祈り」に付いての箇所ですが、広くは「言葉への執り成し」です。我々の言葉はまさに“霊”が意味する「神との関係」に繋がり、開かれている時、言葉の主体たり得るのでしょう。「原発を再稼働するな」「言論の自由に圧力をかけるな」「戦争の準備体制をするな」「辺野古の基地建設を中断せよ」「格差を広げるな」「保育を守れ」「北村牧師の免職を撤回せよ」等など、主体のかかったキリスト者でありたいと思います。